

情報システム研究における非実証主義と構造化理論

Interpretive Study and Structuration Theory in IS Research

愛知学院大学 経営学部 小坂 武

Takeshi Kosaka Faculty of Management, Aichi-Gakuin Univ.

Abstract: It is not uncommon that informations systems result in failure or evolve differently in each organization these days. The use of information systems could be considered a hermeneutic human act. The theory of structuration is proposed as a means of studying the changing process of information systems brought by the hermeneutic act.

はじめに

情報システムは失敗が多いだけでなく、組織毎に異なったシステムへと展開することが認められる(小坂, 1993, 1995; Nandhakumar & Jone, 1997)。情報システムの利用は、人間による解釈学的行為と考えられる。解釈学的循環を通して、システムは利用者に開示し、また開発者はそれに応じてシステム変更を行っていくものと考えることができる。情報システムの解釈学的な展開を本稿は、現象学と解釈学の視点から捉え、それを表現する手段として構造化理論を利用する。

現象学的研究の最初の主題は現象学である。現象学をするとは、現象学をすることの研究でもある。本稿では、情報システムに現象学をすることの意味を考察することから始める。

現象学

本稿の目的は、情報システム (IS) の変化を「説明」するのではなく「理解」することである。そのため、変化の一般性の指摘やその検証ではない。そのような普遍性の議論は実証主義研究の目的である。理解を目的とする研究は、解釈主義 (interpretivism) に基づく。解釈主義では、現実 (reality) についての知識は人間による社会的構築物であるとする (Walsham, 1993, p.5)。本稿では、現象の把握を、言い換えれば現象の記述を作り出したいのであるから、特に現象学 (phenomenology) に関心を寄せる。

現象学は、知ることができるものの全体と信じられる現象 (注1) の理解に関心を持つフッサールによって発展された。現象学は現象そのものへ迫り、その記述を生み出すことに関係する。現象は世界における我々の毎日の経験を内省することで見いだされるが、現象は単にモノの我々に対する現れではない (Boland, 1985)。「現象学は人間の経験の暗黙の構造・意味を明らかにしようとする。それは通常の観察では明らかに出来ない本質を探索する。…現象学には正統的な方法は無いが、ある種の共通性はある。全ての方法は個人の意識的な経験を調べることから始め、意識の継続する再構造化プロセスの中でどのように意味が

展開するかについての分析の中を動き、そしてその個人による経験の批判的レビューで終わる。」(Sanders, 1982) IS について言えば、実証主義は IS をどう設計し管理するかに関わるのに対し、現象学は IS が人間によってどのように経験され使用されるかに関わる (Rathswohl, 1991)。

「現象学は経験の本質を理解するために、意識的方法的研究に関心を寄せる。本質の探索は意味の探索である。それゆえ、現象学は直接的な経験を有意味にする意味構造に関係する。よって解釈学的 (hermeneutic) な問題 (テキストの翻訳と解釈の問題) が現象学の中心の問題となる。」(Boland, 1985) (注2)

解釈学

解釈学は解釈 (interpretation) の学問である。「元来、解釈学は宗教的テキストの解釈プロセスに関わっていた。そのもともとの状況では、我々は歴史的にも文化的にも遠い筆者の作品であるテキストに面していた。そのようなテキストを読むにあたって、我々はそれが表面上には現れていない意味を持ち、重要であると仮定する、そしてその意味を方法的に探索する必要があると仮定する。」(Boland & Day, 1989)

解釈学的方法論的一般原理は、テキストとしての世界についての経験を解釈するにおいて使用する論理前提 (presupposition) と事実前提 (assumption) を知るようになるにつれて、解釈が時間とともに進み、改善することである (Rathswohl, 1991)。部分についての学習を通じた全体についての学習とその逆の進行関係が解釈学的循環といわれる (図1)。

図1 解釈学的循環

部分の意味	<---> 全体の意味
論理前提	理論
事実前提	知識
先見	

解釈学的循環の議論を、存在の意味を問い、解釈しようとする人間の現存在にあてはめて、ハイデッガー

(1994) はわれわれの生のあり方自身が解釈学的なものとする。今日では解釈学はより広い意味合いを有し、解釈されるべきテキストは、書かれたテキストだけでなく、社会的世界での毎日の我々の経験を含むよう Gadamer, Ricouer らによって拡張された。

情報システムと解釈学

解釈学におけるテキストの範囲の拡張は、IS に関すれば、組織や IS が解釈学の対象になることを意味する。情報システムの使用、設計、研究は解釈学プロセスとして最もよく理解できる (Boland, 1985)。利用者がシステムの「部分」(出力、手順など) と相互作用しかつその意味を学ぶことを通じて、「全体」システムの意味を学ぶところの解釈学のプロセスとして IT 利用を本質的に研究できる (Rathswohl, 1991)。そして、どのように部分がフィットし、どのようにシステムが戦術的、戦略的に使用できるかを知るようになる。すなわち、利用者は未知な IS をテキストとして、それを意味あるモノとして解釈しようとする存在である。また IS の開発者は組織を解釈すべきテキストとみなし、その解釈に従って IS 開発を行う存在である。

IS を研究することにおいて、研究者は IS 設計と IS 利用の間の相互作用を読む。それゆえ IS を研究するとはもう一つの解釈学 hermeneutics といえる (図 2)。言い替えれば、インタビューや資料を通して、IS 開発・利用をテキストとして解釈する二重の解釈学になる。

ハイデッガー (1994, p.175) は、道具の用具的存在者としての側面とその故障に伴って発生する客体的存在者の側面を明らかにし、現象学の中で初めて技術を位置付けた。Idhe はこの考えを拡張し、人間と世界の間で道具 (技術) が位置することを明らかにした (Rathswohl, 1991)。五感で感じ取る世界を仲介する電話やメガネなどの技術は、図 3(a) の関係にあり、それは拡大・縮減媒体として作用し、利用者にとって透明な存在である。それに対し、IS は、五感で感じ取る世界を仲介するのではなく、図 3(b) の関係にあり、世界の表象として作用する。出来事が経験されるのは道具を通してだけである。IS の世界は道具を通して経験する世界であり、世界の中の出来事は、道具によって提示されたデータを「解釈」する結果として利用者により推論される。道具は利用者にとって不透明であり、道具は知識を得る可能性の正にその条件として注目される。「結果は、モノと表象との間の形式の明確な対応関係を持たないという点で、テキストのようなものである。それはコトについて何かを我々に伝えるテキストで

ある。」(Rathswohl, 1991) 技術をこのように位置付ける考えは、IS 利用が解釈学的行為であることを支持する。

図 3 道具と世界の関係

- (a) (人間 — 道具) ⇄ 世界
(b) 人間 ⇄ (道具 — 世界)

IS 利用を解釈学のプロセスとして見るこの考え方は、IS をみる全く新しい方法を開く。それは自律的で、創意に富んだ力としてのユーザ像を持ち出す。「利用者は、どのような基本的、先在的な意味においても情報ニーズを持たない。その種のニーズの決定のための基盤は、テキスト自身を読む行為の中に見出されるはずである。」(Boland, 1991) 解釈学の観点から、研究関心は、IS が状況をどれほどよく表現しているかから、状況と出来ることの中に存在するために、その出来ることを取り込むことを IS はどれほどよく読み手に可能にするかにシフトする (Boland, 1991)。

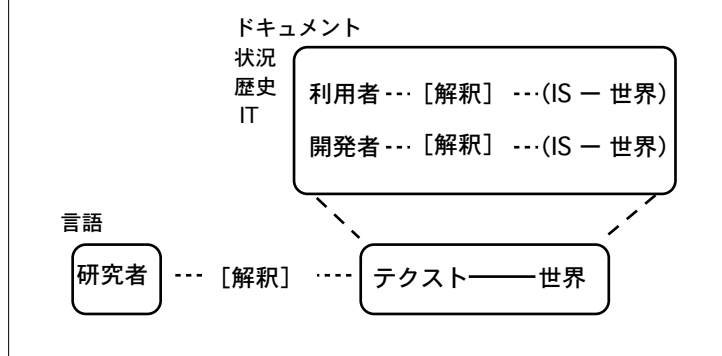
解釈学の問題と研究者

このような解釈学にも問題がある。解釈とは明白な意味の中で隠れた意味を引き出し、文字どおりの意味の中で含意された意味レベルをとき開くことからなる思想の仕事である (Ricouer, 1974, p.13)。「Dilthey は純粋解釈学を提唱した。純粋解釈学は額面通りにイデオロギーを取り入れる。テキストそれ自身の言葉でテキストを理解しようとし、弁証法を無視する。」(Myers, 1994) 純粋解釈学の解釈的アプローチには、次のような弱点があることが Orlikowski と Baroudi (1991) によって要約されている。

- (a) しばしば外成的である条件を調べない。
(b) 意図せざる結果の説明を省略する。
(c) 社会や組織との構造的衝突に目を向けない。
(d) 歴史的変化の説明を無視する。

Myers (1994, 95) は、Bernstein と Hoy を引用し、

図 2 二重の解釈学



批判解釈学あるいは弁証法的解釈学がGadamerとRicouerによってその基盤が構築されたという。批判／弁証法的解釈学である現代の解釈学は、上記の純粹解釈アプローチの欠点を克服しようとする努力の現れである。批判解釈学は社会の現実が歴史的に構成されたものであるという事実と強調する。純粹解釈アプローチと批判解釈学との間の鍵となる差違の一つは、研究者が参加者の自己理解を単に受け入れるのではなく、所与の状況での理解の全体性を批判的に評価することを求めることである（Myers, 1994）。

研究者はIS利用を批判的に捉えられる立場にある。研究者は、インタビューを通じて、ISに対する利用者の言説を得ることができる。利用者はISがどのような意味を持つかを部分的に述べるができる。しかし多くは実践的意識の中にあり必ずしも表明できない。研究者は、利用者の実践的意識や世界観を他のケースや関連知識から推論でき、そのことで全体の意味を歴史的に明らかに出来る立場にある。すなわち、研究者は、利用者や開発者の言説的知識、実践的意識、世界観を総合化することで、彼らの実践を意味のある記述とすることができる。

批判／弁証法的解釈学は歴史的な分析を取り上げるが、伝統的解釈学の欠点をカバーするに十分ではなく、また具体的な研究方法を持たない。

構造化理論

Giddens（1976, 1979, 1984）が提唱する構造化理論（Structuration Theory）は、主意主義と決定主義（決定論）、主体と客体、動力学と静力学の3つの二元論を、構造の二重性という考えで克服し（Archer, 1982）、伝統的な解釈学が有する問題を解消する。

本稿で暴露しようとする意味の構造は、ISの利用者や設計者の経験の本質である。しかし、それらは客観的に決定的な、非歴史的な、基盤的真実ではない。代わりに、それらは組織におけるITを扱う社会的実践である。この実践に関わるISの利用者や開発者の解釈学的プロセスを捉えるための枠組みとして、構造化理論を利用できると考える。

主意主義で構造は、人間によるプラスチック生成物である（Giddens, 1984, p.26）。決定論では構造は行為を制約する与件である。構造化理論では、構造は行為の中に存在する。「構造は実践の再生産の媒体であり、同時に結果である。構造はエージェントと社会的実践の構成に同時に入り込み、そしてこの構成の生成の瞬間に「存在」する。」（Giddens, 1979, p.4）構造は物理的な存在ではなく、社会的システムの再生産の中に再帰的に含意されるルールと資源（人を支配する、動かす能力と、モノを支配する能力であり、モノ

そのものではない）であり、それは人々のメンタル・トレースとしてだけ存在する。

図4 構造の二重性 (Giddens, 1984, p.29)

構 造	意 味	⇔	支 配	⇔	正 当 化
	⌞		⌞		⌞
(様相)	解釈図式		便 宜		規 範
	⌞		⌞		⌞
相互行為	通 信	⇔	権 力	⇔	許可・制裁

構造には、意味、支配、正当化の各構造がある（図4）。意味の構造は世界観であると考えられる（ギデنز, 1987, p.175）。構造をこのように分割するのはあくまでも分析のためであって、現実がこのように分割されているのではない。例えば、資源の動員は常に、共通知識の意味論的および規範的（正当化）側面を伴う。資源は、意味論的および規範的ルールが実行されるところで手段を提供する（Cohen, 1987）。

構造はエージェントが日々行うところのものについてエージェントが持っている知識と独立ではあり得ない（Giddens, 1984, p.26）。エージェントは共有知識としての意味の構造から、行為に必要な解釈図式を様相（modality）として取り出し現実を解釈する、逆にその解釈図式のもととなる共有知識の再生、すなわち意味の構造の再生に寄与する。また実践から新たな解釈図式を作り、構造への変化を起こすこともある。

知識は、言説的意識、実践的意識、無意識の3つのレベルの意識に関係する。エージェントが行為の理由を聞かれとき、答えられる知識が言説的意識のものである。実践的意識は、特に自らの行為の条件を含む社会的条件についてエージェントが知っているものであるが、言説的に表明できないものである。「実践的意識の意味は構造化理論にとって基本的である。現象学とエスノメソドロジーにおいてのみ、社会学の伝統の中で、我々が実践的意識の性格の詳細で緻密な取扱を見出す。」（Giddens, 1984, p.6-7）

構造化理論の貢献

構造化理論は、捉えるべき知識として意味の構造だけでなく、支配および正当化の構造を捉える。これは研究者に広い範囲での考察を要求する。構造化理論は意味の問題だけでなく、組織における政治や文化という側面を扱うので、研究者にその部分へも関心を向けさせ、暗黙の意味の構造により迫らせ、二重の解釈学を実現させる可能性を有する。また構造化理論では、研究者はエージェントによる言説的意識だけでなく、

実践的意識にある世界観（意味の構造）の指摘が要求される。このような知識の範囲と深さは、エージェントの言説を批判的に捉え、暗黙の意味の構造を暴露する手がかりとして作用する。構造化理論を認識の枠組みとして使用することで、研究者は行為の背景にある暗黙の知識を暴き出す役割を、インタビューやテキストの比較検討を通して、担うことができる。

構造化理論ではエージェントの行為は構造に影響され、構造を再生し、またこの構造を変えようとする。これは部分としての行為と全体としての構造の間の相互関係、弁証法を明らかにすることに相当する。ISがなぜ変わるのかは、ISの部分と対話しながら、利用者がISの全体を解釈するからであり、そのISの意味を組織の中に見い出し、あるいは見い出すべく意見を表明することで起こる。これは、動く解釈学的循環に相当し、利用者がISをテキストとして解釈し続ける様子を捉える。構造化理論を利用することで、ISと組織と人間の動力学を表現でき、ISに関わる人間の解釈学を捉えることを意味する。

解釈学的研究で生まれる何かは、完成品としてではなく、内省、共有、そして批判のより大きなサイクルへの一歩として研究仲間に提供される（Boland & Day, 1989）。

注

1. 現象については ハイデッガー(1994), pp.79-86 を参照。
2. 現象学と解釈学の関係の詳細については、例えば Ricouer (1974), pp.6-11 参照。

参考文献

- Archer, M. S., "Morphogenesis versus Structuration: On Combining Structure and Action," *British Journal of Sociology*, Vol.33, No.4,1982, pp.455-483.
- Boland, R. J., Jr., "Phenomenology: A preferred approach to research on information systems," In Mumford, E., Hirschheim, R., Fitzgerald, G., and Wood-Harper, A.T. (Eds.), *Research Methods in Information Systems*, North-Holland, New York, 1985, pp.193-201.
- Boland, R. J., Jr., and Day, W.F., "The Experience of System Design: A Hermeneutic of Organizational Action," *Scandinavian Journal of Management*, Vol.5, No.2,1989, pp.87-104.
- Boland, R. J., Jr., "Information System Use as a Hermeneutic Process," in Nissen, H.E., Klein, H.K., and Hirschheim, R.A. (Eds.), *Information Systems Research: Contemporary Approaches and Emergent Traditions*, New York: Elsevier Science Publishers B.V.,1991, pp.439-458.
- Cohen, Ira J., "Structuration Theory and Social Praxis," in Giddens, A., and Turner, J. (Eds.), *Social Theory Today*, Polity Press,1987, pp.273-308.
- ガダマー, H. G. 著、饒田 収、他訳、真理と方法1、法政大学出版局、1986.
- Gadamer, H. G., *Truth and Method*, The Seabury Press,

New York, 1975.

- Giddens, A., *Central Problems in Social Theory*, University of California Press, Berkeley, 1979.
- Giddens, A., *The Constitution of Society*, Polity Press, Cambridge,1984.
- ギデンズ、A. 著、松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳、社会学の新しい方法規準：理解社会学の共感的批判（*New Rules of Sociological Method: A Positive Critique of Interpretive Sociologies*, 1976）、而立出版、1987.
- ハイデッガー, M. 著、細谷貞雄訳、存在と時間（上・下）、筑摩書房、1994.
- 小坂 武、「役員情報システム実態の探索的研究：EISの記述モデルと仮説」、経営情報学会誌, Vol.2, No.2, 1993, pp.15-33.
- 小坂 武、エグゼクティブ情報システム、シーエムシー、1995.
- Kosaka, T., and Fitzgerald, G., "Structurational Analysis of Executive Information Systems between the UK and Japan," *Proceedings of the Eighteenth International Conference on Information Systems*, Atlanta, December 1997, pp.496-497.
- 小坂 武、「情報システム研究分野へのGiddens構造化理論の応用」、経営情報学会1997年秋期全国研究発表大会予稿集、1997年11月。
- Myers, M. D., "A Disaster for Everyone to See: An Interpretive Analysis of A Failed IS Project," *Accounting, Management and Information Technology*, Vol.4, No.4, 1994, pp.185-201.
- Myers, M. D., "Dialectical Hermeneutics: A Theoretical Framework for the Implementation of Information Systems," *Information Systems Journal*, Vol.5, No.1, 1995, pp.51-70.
- Nandhakumar, J., and Jone, M., "Designing in the Dark: The Changing User-Developer Relationship in Information Systems Development," *Proceedings of the Eighteenth International Conference on Information Systems*,1997, pp.75-87.
- Orlikowski, W. J. and Baroudi, J. J., "Studying Information Technology in Organizations: Research Approaches and Assumptions," *Information Systems Research*, Vol.2, No.1, 1991, pp.1-28.
- Rathswohl, Eugene J., "Applying Don Ihde's Phenomenology of Instrumentation as a Framework for Designing Research in Information Science," in Nissen, H. E., Klein, H. K., and Hirschheim, R. A. (Eds.), *Information Systems Research: Contemporary Approaches and Emergent Traditions*, Elsevier Science Publishers B.V, New York,1991, pp.421-438.
- Ricoeur, P., "Existence and Hermeneutics," in Ihde, D. (Ed.), *The conflict of interpretations: Essay in Hermeneutics*, Northwestern University Press, Evanston,1974, pp.3-24.
- Sanders, Patricia, "Phenomenology: A New Way of Viewing Organizational Research," *Academy of Management Review*, Vol.7, No.3, 1982, pp.353-360.
- Walsham, G., *Interpreting Information Systems in Organizations*, Wiley and Sons, Chichester,1993.